



時は天正十九年（西暦1591年）。

すっかり傷の癒えたりんは、前田慶次郎の家人として小吉とともに仕えていた。

兄とも慕い愛した留蔵は、りんを慶次郎に託して死んだ。慶次郎を仇と付け狙ったりんだったが、それを聞かされ復讐を忘れた。

あとは小吉との約束を、死ぬまで守るのだ。命を救ってくれた小吉と生きる！

だが、時が過ぎても小吉はりんの肉体を求めようとはしなかった。

りんは鈴鹿山中に棲む間諜、暗殺を生業とする山の一族に育てられた。教育係の者はりんが赤子の頃、天正三、四年頃に拾われて来たと言っていた。とすると自分は十五、六である。まだ身体は大人にはなっていない。体が育てば男の体になってくる。小吉がりんを性の対象として興味を持つのもあと二、三年までであろう。

小吉は惚れたりんに終生の契りを誓い、りんはそれを受けて、心変わりを小吉がすれば殺すと言い渡した。

りんは、心の中で小吉への契りを誓っていたが、それを小吉に言えなかった。

（虫けらにも等しい刺客を生業にしていた俺が、どうして歴としたさむらいである小吉にそれを告げられる・・・）

自分はそれに値しないと考えていた。

大体、まともな男の小吉が、同じ男のりんを終生愛し続けるなど出来っこない。数年経てば、りんだって大人のごつごつした身体になるだろう。心には女の気持ちが宿ったまま。

小吉が生涯の契りと言っても気持ちは変わる。小吉は言ったことは曲げる男ではないから、小吉の自由を縛ることになる。

自分の過去のわだかまりと小吉の愛の不安を持つりんであった。

だが、許された時間はもっと短いかも知れない。

刺客の掟を裏切った俺を、かつての仲間が許すわけがない。彼らがいつ襲ってくるか分からないのだ。しかも俺の手は幾人もの無垢の人の血で汚れている。

俺は明日死ななくてはならなくとも、小吉の慈悲のなかで、一日一日を暮らす、それが幸せなのだろう・・・

りんは思った。殺されるか、小吉が俺に飽きてしまうまで、そばにいる。それでお仕舞いだ。

神社仏閣の多い京都は、平時にはしょっちゅう祭りがあちこちにある。

また、三条、四条の河原には道々の者、大道芸人、河原者達が種々の小屋や幔幕を張り、飾り物の販売、踊りや芸を見せる。

祇園祭があと数日というある夜、慶次郎は上洛中の上杉景勝の大家老、直江兼続の屋敷に連歌の会に呼ばれた。

小吉はお供しようと身繕いしていたが、

「小吉。今夜はよい」

「え・・・しかし、一人では・・・」

「松風（慶次郎の愛馬）がおる。今日は祇園で屋台が立つであろう。りんと行ってこい」

「えっ！二人で祇園に行けるの・・・?!」

「うむ・・・お前と行ってこいと前田様がおっしゃってくれた」

りんはうれしさを満面に浮かべた。

「小吉さん、四条に河原踊りと芝居が立つんだ・・・それにも行きたいな」

「あ・・・ああ。お前の好きなものを見よう」

「俺・・・着替えてくる！」

りんが着替えた姿を見て、小吉は唾を飲んだ。

いつもの浅黄の小袖ではなく、薄い桃色の麻の生地の小袖に萌葱の膝までの短袴を着ている。短袴は、腰横の切れ目が大きく、膝の裾は朱の細紐で括れるようになっている。今、京都の若衆の間で少し緩めに括るのが流行だ。

これは寺社にいる稚児の装束を真似ているもので、『稚児風』と呼ばれる衣装である。

長い髪は後ろに垂らし、首の辺で小吉が与えた紫の絹紐で巻いてある。足はすべやかな素足に草履を履いている。

小吉は困った。

りんは小吉のためにめかしているのだが、これでは本当に稚児を連れて歩いていると衆目には映るだろう。それも飛び切りの美しい若衆（恋人）を。

りんは流行に敏感で、小吉に喜んで貰おうと常に身繕いを意識している。いや、小吉に嫌われまいと努力をしているのだ。

「・・・小吉。俺、変か？」

あまり小吉がうれしそうな顔をせず、りんの姿を見ながら黙っているので心配になった。

「い・・・いや！そ・・・そんなことはない！」

女だったら躊躇無く、賛美の言葉をかけるだろう。

しかし、りんの将来を案ずる小吉は言葉を呑んだ。

生涯の契りを誓ったが、儂は武将、前田慶次郎の一の家来。主よりも先に死ななくてはならぬ。だが、この戦乱の世をりんには生き抜いて欲しい。だから儂とはいつか、儂の死を以て別れなければならぬ。だからりんの男（を）の子としての性を汚したくはなかった。

それでもうれしそうにするりと連れだって、彼らは伏見から上京の四条河原に向かった。

四条河原の芝居小屋に入ると案の定、りんの美しさは人々の目を奪う。

厳めしい古武士の小吉が側にいるので無事だが、ほっておくと芝居そっちのけで何人もがりんを口説くだろう。

腕の股を小刀で切り、血を見せつけるような連中も出てくる。それがこの時代の求愛の表現の一つであった。

りんはそんな連中に気が付いていないのか、小吉に話しかけ、はしゃいでいる。

小吉は思う。

(儂のような男に、この天から降りてきた者はそのような笑顔を呉れるのか・・・)

芝居が終わると、ぞろぞろと幔幕の外に出る行列の中、小吉は自分より一回り小さいりんの肩を抱いた。

芝居を見ていた後ろの若い連中の一団が、じろじろとりんを見ていたのだ。後に傾奇者と呼ばれる男気を売る連中だった。女よりも若衆を連れ歩くのが流行だ。

この時代は『若衆好み』という風俗があった。良家に生まれて素直に育てられた、恵まれた子息達が世間の羨望の的だった。教養高く、見目麗しく、身こなしのよい少年達に男も女も憧れた。彼らの姿絵が飛ぶように売れた。

この連中も煌びやかな金糸の小袖を着て、女のような仕草をする若衆達を連れていた。明らかにふしだらな生活をしていると判る。だが、りんの清楚な美しさに心を奪われた傾奇者達に、若衆達はつつけんどんな態度を取り、喚きはじめていた。

りんは肩を抱かれると、びっくりして小吉を見た。夜に同じ布団で寝る。だが、お互いに性を望むことはしない。

小吉もりんも、それをしてしまってその結末を怖れているのだ。

・・・お互いの暖かさと匂いに包まれいつしか寝てしまう。起きている時も決していちゃいちゃしたりしない。だから外で手を握り合ったこともないのだ。

りんは、その口に愛らしい笑みを浮かべて唇を噛んだ。うれしかった。

りんの刺客として育てられた感覚は危険に対して鋭い。

傾奇者達は金覆輪の太い鞆の大小を腰に差し、色鮮やかな長い下げ緒を鞆の後ろに掛かる様にぶら下げていたが、身のこなしは武芸の達人達とは思えなかった。そんな抜きづらいものを持つ彼らの戦闘能力の低さに、りんの警戒心は発動していなかった。

りんには小吉しか見えておらず、その小吉だけに向けた表情が、どのような影響を周囲に及ぼすか関心が全く無かった。

だが、傾奇者の一人が小吉を思い出した。

「おい、あの男は前田慶次の『かまやり』だ」

そしてさらに思い出した。この四条河原で、過去に行われた『決闘』を。

十数人の荒くれ者に囲まれて、瞬く間に数人を血祭りにして残りを潰走させた『阿修羅』のことを。その阿修羅は少女のような容姿なのに、無慈悲に荒くれどもの首を刎ねていった。興福寺におわす少年阿修羅が降臨したと流れいる見物人達はどよめいた。そして後からその阿修羅は伏見に住む浪人武士、前田慶次郎利益の従者、『ながくろかみ』だと知れた。

その事件の後に、阿修羅様を拜むために老若男女が慶次郎の伏見の屋敷に押しかけた。

絡むのに相手が悪すぎることを悟ったか、傾奇者どもは散っていった。ほっと緊張を緩める小吉だった。

だが、小吉の受難はこれで済まなかった。

「小吉、夜店を見よう！」

りんは楽しそうに、提灯で明るい八坂神社の参道の夜店を覗き小吉に指さす。

そのとき、武家の女中らしい若い女が小吉に声をかけた。その少女はりんと同じくらいの年か。くりくりとした目で小吉を見る。

小吉はその女中と後ろにいる武家の夫人を見て仰天した！

「こ・・・これはお船様！それに催殿」

その夫人は三十路を越えているだろう、しかしその品のよい艶やかさは群を抜いていた。

小吉はりんに惚れる前は彼女を夢見たものだ。その時の記憶から小吉の胸は騒いだ。そしてりんとその若い女中は、それを小吉の慌てぶりから感じ取っていた。

小吉は周りを見回したが侍がいない。

「お、お共は何処へ？」

「お殿方は連歌に夢中です。まあお酒にもでしょうが。ですから息抜きに二人だけで夜店に来てみました」

お船の方はりんをちらと見た。

「・・・この方は小吉殿のお小姓様ですか？」

小吉はさらに慌てた。

「い・・・いや・・・その・・・これは儂と共に前田様に仕える者で・・・そのような・・・」

連れの若い女中がほほと笑った。

「お船様。槍を持たれたら天下無双の小吉様は『お稚児好き』とは違いますよ」

この女中のりんへの敵対的な言葉よりも、苦し紛れの小吉の最後の台詞がりんにかちんときた！それに加えて火に油を注ぐ様に、小吉は小声でりに言った。

「りん・・・悪いが先に帰ってくれ！儂はお船様を屋敷に送らねばならん！」

小吉はこの女中にりんを付き合わせると、事態がますます悪化することを予感していた。彼女は、同じ年頃で男（を）の子なのに、自分よりも美しいりに明らかに敵意を持っている！

だがりんの心にも火が点いていた。

「分かりました！ではお船様、失礼を致します！」

りんは慇懃にお辞儀をすると、ぷいと後ろを向いて川筋を伏見の方に歩き出した。

「ほほ・・・気の強い阿修羅様！」

女中が勝ち誇ったように小吉を見た。

(小吉の馬鹿野郎！)

りんは無性に腹が立ち、鴨川の暗闇をずんずん歩いた。それに『そんな者では』と言おうとした小吉の言葉が悲しかった。

(そりゃ・・・俺は男さ・・・でも、お船様がいくさ場まで着いて行けるか！命が果てるまで側にいれるか！・・・子供は産めないけど・・・)

りんの目に涙が溜まっていた。この阿修羅の心には無慈悲と慈悲を請うものが同居していた。そして自分が男であるのか、女であるのかという問いにも無関心であった。天に棲む阿修羅という戦いの神に性別があるのか。その荒神が少年の肉体に降臨して来た様だ。

肉体を持ったとたん今まで一つだった心が二つの性に別れた。

幼い頃にりんに穢れた欲望を持つ鬼吉という男に、女として犯され続けた。それがりんの自虐的で女性的な面を引き出したのだ。

川端の土手に沿って人の付けた道を歩く。月の明かりで、向こうから二人の人影がやって来るのが見えた。

すれ違うとき、りんは道を譲るために草むらに一步踏み出した。しかし、一人が同じ方向に踏み出す。りんはまた一步横に踏みだし避けようとしたが、また前を塞がれる。間近に向かい合った上背のある男がりんの顔を上から覗く。浴衣を着流して遊び人風だ。

「ほう、こいつは上玉」

「申し訳ありません。先を急いでおりますのでご免下さい」

擦り抜けようとするりんの両肩にそやつは手を掛けた。

「いくらじゃ？弾むぞ」

りんは言った。

「俺は腹の虫の居所が悪いんじゃ！他を当たれ！」

「何！このこわっぱが！」

男はりんの小袖の肩を掴み川の方に引きづろうとした。

「あの船の上で可愛がってやるわ！その様子では、ここの『掟』を知らぬ新参者であろう！」

男は繋いであった小舟にりんを乗せようとした。りんは男の手を軽く捻り小袖から離すと、逃げるでもなく自分からふわりと飛んで小舟に降りた。痛みを忘れてきょとんとしていた男は、腕をぶらぶらさせながら笑って小舟に乗り込んだ。

「良い子だ・・・大人しくすれば痛い目に会わぬものよ・・・」

言い終わらぬうちに男の手がりんの懐に伸びたが、

「うわーっ！」

次の瞬間、男の体は大きく弧を描いて派手に水中に落下した。

それを見たもう一人の男は、慌ててもと来た道を駆け出して行った。

助けを求める男に權を差しだし、船の縁に取り付かずと船を飛び降り、りんは再び歩き出した

少し行くと、月明かりにふと足を止めてしばらく河面を眺めていた。

(・・・子供が産めなけりゃ・・・小吉さんだっていつか俺に飽きるよな・・・年取れば俺なんか・・・)

また悲しくなってきた。

刺客業という世の中の暗闇で育った自分など、小吉にとって取るに足らない存在だということは分かっている。

どうしようもないことだが、悲しい・・・

ふいに後ろに人の気配がした。

振り向くと三人の者が立っていた。

一人が火縄をくるくると回すと三人の顔が浮かび上がる。りんと同じ年頃か、少し年上の少年達のようなだった。小袖に伊賀袴（足の臍の裾を括り動きやすくしてある袴）を履き、二重に巻いた腰の帯には脇差しが差さっており、見回りのような雰囲気でありんを見ている。りんは涙を指で拭った。

少年の一人が誰何した。

「おい。お前。どの『家』のもんや？」

「家？」

「ここで商売するんならどこのもんやか言うてみい！」

そういえば、道すがら木陰や焚き火の側に立っていた者達がいた。女の格好をした者やりんのような稚児の姿をした少年達だ。

この場所は何かの縄張りか？肩を抱かれて暗がりに行く二人連れも見た。さっき、川に投げ込んだ男の連れ合いが彼らを呼んだのか？

「・・・商売なんかしてない」

「ほほん・・・連れもなく、そんな髪を垂らして稚児のようなかっこして、とおらんぞ！」

「ほんとじゃ！俺はそんなもんじゃない！」

りんは三人の間を擦り抜けた。火縄を持った男がりんの顔にそれを近づけた。間近に迫ったりんの怒りに満ちた顔を見て彼らはびっくりした。その鬼気迫る美しさに！だが、去ろうとするりに気を取り直して追いつき、囲んだ。

「お前、どこかの寺から逃げて来たもぐりやろ！儂等と来い！どこのもんか吐かせてやる。来ないと痛い目にあうぞ！」

りんはふふんと笑うと無視して行こうとした。一人がりんの腕を掴んだ。その次の瞬間、りんはそやつの腕を捻り、反動を利用して投げ飛ばした。

「こ、こいつ！抗うか！」

残りの二人が同時に襲いかかったが、りんは一人は肘で鼻をくじき、もう一人は脚を後ろに跳ばし、つんのめらした。転げる三人を尻目に行こうとしたが、最初の一人が起きあがりよろよるとりんの前に駆け込み土下座した。

「た・・・頼む！このままでは俺たちの役目が済まん！見慣れぬもんが商売しているとたれ込みがあったんや！もしあんたが商売してないのなら俺たちが守る！・・・だからどうか親方の家に俺たちと来てくれ・・・！」

そやつは頭を河原に擦り付けた。りんは考えていたが、

「いいよ。俺を連れて行け」

「・・・俺は唐丸や。あんた強いんやな」
「俺はりん・・・竜胆丸（りんどうまる）だ」

唐丸が持った火縄のあかりでよく見ると、唐丸も整った可愛らしい顔をしている。三人は一樣に髪が長く、髻に金や銀の紙縷を使っている。

四人は鴨川から離れ、二階建ての楼閣が建ち並ぶ一角に入っていった。
宮川筋である。

その中でひととき大きな商売屋の間口に入った。

土間の式台の横に窓に沿って、数人の人間が座っている。女物の着物や稚児風の衣装を纏った若衆達だった。月代（さかやき）を剃った頭を布巾で隠した者や厚い白粉を塗りたくった者・・・一目見て、男だということが分かる者もいる。

彼らはりんを見て羨望と憎しみを露わにした。

「なんや、この子は？新参かい？」

「こんな子連れて来たら、うちら商売あがったりや！寺に売っちまいな！」

りんは不思議そうに若衆達を見ていた。

「親方！川筋にいた見慣れぬ者を連れて来ました！」

ゆっくりと奥間から現れた親方と呼ばれた男を見てりんは仰天した！

六尺豊かな大男だった。が、大仰な女様に結った髪と厚い化粧、派手な打ち掛けを三枚重ねて着ている。そのごつごつした大きな手には、まだ珍しい南蛮渡来の長い煙管が握られていた。

太い首に喉笛も突き出ていて、お世辞にも女とは言えることは出来ない。だがその仕草とわざと掠れさせた低い口調は女のものだった。

「その子かえ。無断で商売していたのは？」

「・・・俺は商売なんかしていません。四条から川筋をおりて（南下すること）きただけです・・・」

親方は鋭い目つきでりんを睨んだ。

もう四十は超えているのだろう。えらの張った顔の皺が白粉の下でもよく分かる。だが、りんはこの男が武芸に秀でていることを感じ取った。

踊りのように足を運ぶが、腰の動きにすきがない。親方もそんなりんに何か感じたのか、煙管を右後ろにゆっくり流した。左足（さそく）を出して撃ち掛かる気を顕（あらわ）した。りんの目が遠目になり、無意識に右足を引き半身になって身構える。

親方はそんなりんを見て、また煙管を銜えふふんと笑った。

「・・・この子の言ってることは、ほんとならしい・・・でもとんでもない子を拾ってきたね。唐丸。この子は武芸の心得があるよ」

窓辺の若衆が喚いた。

「親方！騙されちゃ駄目や！その子の格好をよく見て！商売しようとしてたに違いあらへん！」

親方が見台の前に片足を伸ばして胡座をかいた。股の裾から太い足が覗くが、臍毛がびっしり生えている。家紋の半纏を纏った数人の男達が、棒を持って戸口を固めた。りんは首を回して彼らを一瞥した。いづれも棒術の心得があるのか、いつでも棒を繰り出せる構えを取っていた。足

軽か僧兵くずれか。

親方が口から煙を吐きながら問うた。

「何でこの宮川筋の近くでうろうろしてたんや？ここは若衆好きの坊さんやお侍が来る所え」

りんは目を落とした。小吉の態度が記憶に戻った。肩が震えた。

りんは構えを解いた。体が隙だらけになった。

「・・・俺・・・ここで働けるでしょうか？もう戻りたくない・・・」

若衆達からええーっという声上がる。

「冗談じゃない！そんな子、上げたらうちら湯漬けも喰えんようになる！お頭！そんな子上げたらあかん！」

りんは彼らに向かって膝を落とした。

「お願いします！俺・・・もう戻りたくないんです！何でもします！俺があなた方の邪魔になるのならどんな言いつけでも聞きます。・・・だからここに置いて下さい！」

首から肩を露わに着崩れした小袖を纏った若衆が、興奮して床を踏みならしながら式台の上からりんを見た。手には刃物を持っている。

「・・・じゃ、その可愛い顔を傷つけて貰おうか！その鼻を削げ！出来んのじゃったら出て行け！」

りんの前に錆びた鎧通しが投げられた。武士がいくさで敵と組み合った時、鎧の隙間から、その命を奪うために作られた小刀である。錆び付いていると言うことは、持ち主はさむらいを辞めたということか。

その若衆をじっと見上げていたりんは、息をすうと吐くとそれを手に取った。

りんが鎧通しを鼻に当てようとしたその瞬間、飛んできた煙管がりんの胸に飛んできた。りんはとっさにそれを掴んだ。

りんは親方を見た。

「やめや！お前達、そんなことをこの子にさせてまで生き延びたいのか！この子は本当に自分の鼻を削ごうとしたぞ！それがお前達の本心か！」

若衆達は首を垂れ押し黙った。親方はりんを睨んで言った。

「一息で迷いを払うなぞ、お前はただ者ではないな！」

りんは土壇を睨み付けていた。

先からりんを凝視していた一人の若衆が叫んだ！

「そ・・・その子は！阿修羅じゃ！あの前田慶次の『長黒髪』じゃ！」

「おお！そうじゃ！四条河原で一瞬で何人もの首を取った阿修羅様じゃ！うちも観ていたわい」

後ろの番人達はそれを聞いて一步下がった。背中がぞぞと寒くなった。

親方は呆気にとられていたが、にやりと笑って煙管を横口に含みそのまま言った。

「・・・では下働きをして貰おうか。その顔は炭で汚して頬被りでな。客は取らさぬ」

お船達を屋敷に送った小吉は、急いで伏見の屋敷に戻った。しかしりんは帰っていない。胸騒ぎがした。りんが言いつけに背いたことはかつてない。

儂はりんを今宵、傷つけたかも知れぬ！

落ち着いて待つ居られず、ついに小吉は屋敷を掛け出でた。

四条に戻り、店じまいをして酒盛りをしている神人（じにん）達にりんを見かけたか問うた。

りんの容姿は目立つ。何人かはりんが通ったことを覚えていて、小吉はその言に従って鴨川を南下して行った。よがり声を上げている交合中の連中をも問いただし、りんが宮川筋に連れて行かれたことを突き止めた。

宮川筋には女娼に代わって男娼の楼閣が建ち並んでいた。女色を絶った僧侶や小姓好きの武家が通う場所である。

寄りによってそのようなところに！

りんは、式台から上がったすぐのところの店の番台の前に正座していた。

親方が新しい煙管をくゆらせりんにやさしく聞いている。

「・・・お前は前田慶次に仕えている身だろう？・・・何故、こんなところで働きたいというのだ？」

「・・・もう・・・嫌になったんです。俺・・・」

「酷い目にあったのか？」

「・・・」

りんはしばらく考えてこっくりした。

「ここには色々な事情の子がいるが・・・殆どの者が自分が『男』で居続けることに飽いたか嫌になった輩じゃ。それでこの道に入ってきた。だが、年取れば惨めじゃ・・・だから俺はここに『家』を作った。一度入れば一生守ってやる。しかし簡単には出られぬぞ！」

親方は意地悪く聞いた。

「好きな男がいたのか？」

りんは真っ赤になって俯いた。

そのとき通りで聞き覚えのある声がした。

「桃色の小袖に稚児風の短袴を履いたおのこを知らんか？ここら辺に連れて来られたと聞いたのじゃ！」

りんははっと顔を上げ、

「親方様！どうか俺を匿って下さい！・・・俺・・・あいつから逃れてきたのです！」

小吉はついに、りんらしき者を連れて何人かが入っていった、という楼閣に乗り込んだ。

土間に入ると若衆が色めき立つ。

「あ～ら、なんと渋いお方！抱かれないわ」

「お武家様！うちらを買ってくらはりませ！腰を抜かすまで良く差し上げます」

小吉はびっくりしてさざめく『彼女』等を見たが、真っ赤な顔で呼ばわった。

「お頼み申す！ここにりんという男（を）のこが来たはずじゃ！迷惑をお掛けしたのなら償いはする！どうかお引き渡しを願いたい！」

親方がゆっくり奥から出てきた。小吉はその出で立ちと白粉だらけの顔に仰天したが、この当主と見ると、

「お願い申す！ここに美しい若者が来たはずじゃ！どうか会わせて欲しい！」

小吉をじっと見ていた親方は、にやりと笑った。

「・・・久しぶりじゃな！角南殿！小吉よ！」

小吉はまたびっくりして、親方を見た。

目が丸くなる！

「お・・・お主は斎藤越後！な・・・何して居る！」

「ははは・・・見ての通り若衆茶屋の親方よ！」

「そ・・・そうか・・・お前が逐電して早、五年か・・・」

小吉は台帳箱の前で胡座で座っていた。

斎藤越後は前田利家の母衣衆（マントのような目印の袋を背負って、戦陣の中枢で活躍した騎馬武者）であった。勇猛さで鳴らしたものだが、ある時突然、逐電したのだ。以前から女ものの衣装を鎧の下に着け、白粉を塗りたくって戦場を駆け回っていた。

婆娑羅武士の慶次郎と仲が良かったが、利家や他の同僚にお家の笑い者よと咎められ、ふいに前田家を去ったのだ。

「儂は慶次が言う『大不便者』よ。儂のようなはぐれ者を集めて、この商売をし出した。・・・可愛い奴らよ」

小吉は、恐る恐る窓辺に居並ぶ若衆達を見た。彼らは外を覗かず客寄せもそっちのけで、小吉をにたにたしながら眺めている。中には目配せする者も・・・小吉は脂汗を額に浮かべ唾を飲み込んだ。

「・・・それはそうと、その・・・りんと言う者を知らんか？」

越後は表情をこわめ、ゆっくりと煙管を灰瓶に打ちつけた。

「その者はお前の何だ？」

「・・・その者は・・・儂の・・・儂にとって大切な者だ・・・」

越後は口をへの字に結んで芝居がかった台詞を言った。

「それじゃーお前はそんな大切な者をぞんざいに扱ったのかい！大切なもんなら、なんで儂等のところに置いてくれ、なんて言わせるんじゃ！なあ、竜胆丸よ？」

小吉はびっくりして越後の視線を追って背後を見た。柱の陰に、いつのまにかりんが下を向いて座っていた。咎めるような目を小吉に向けた。

「りん！・・・」

「小吉さん。俺、ここでずっと働くよ。前田様には悪いけど・・・俺のいる場所はここしかない！みんな優しくしてくれるし」

「な・・・何を言っている！りん！帰るんじゃ！」

りんのところに行って腕を取ろうとした。

「いやじゃ！俺なんか・・・俺はどうせ男じゃ！お前に焦がれたって・・・お前はいつでもいいんじゃろう！」

言葉を継げぬ小吉に、廻りの若衆どもががなり立てた！

「そうじゃ！お前のような情けない男にりんは渡せぬ！」

「帰れ帰れ！」

「りんを連れて行きたくば、土下座して願え！」

「そうじゃ！土下座じゃ！」

武士が間違っても、武士でない者に土下座などせぬ。家と土地と名誉のために生きる武士が、そのようなことをする分けがない！

小吉は震えて刀を握りしめていた。顔は鬼瓦のようだ。りんは横を向いている。紅潮した頬にかかる逃れ毛が口端に入っている。美しい。

越後は小吉がりに乱暴しようものなら、即座に番人に取り押さえさせ、放り出そうと思っていた。『大切な者』などと人前では言いながら、帰れば打って従わせようなどという男ならば許さぬ！

土間の番人の一人に目を合わせた。番人はゆっくり頷いて棒をくるりと廻した。

すると小吉は諦めたのか、土間の方に向かった。りんの目は小吉の背を追った。

これでいい。さよなら、小吉さん。

だが、小吉は土間に裸足で飛び降りると、力士のように足を広げ、腰を落とし土を足の指で踏みじった。そして天上を睨んだ。

りんのほうに振り返り、両膝をどしんと落とした。そして両手を土壇に突いた。

皆、それを見て声を押し殺した！

頭の越後は面白そうに見台から見物している。

りんははっとして立ち上がり、小吉のもとに走った。

小吉が大声で言った。

「りん！今生の願いじゃ！儂のもとへ・・・」

「小吉！駄目じゃ！」

りんが土間に駆け下り小吉の前に跪いた。

小吉の動きを止めようとした寸前、小吉の頭は鈍い音を立てて土壇に打ちつけられていた。頭の下から小吉のくぐもった声がする。

「戻ってくれ！」

「馬鹿！さむらいが！俺のような者に頭を下げるな！頭を上げろ！」

りんは小吉の頭を掴んで必死に上げようとした。だが、小吉の強靱な首はびくとも動かない。

りんは小吉の頭と背をぽかぽか叩き出した。

「小吉の馬鹿！馬鹿野郎！なんで俺なんかに！・・・」

小吉の声が再びした。土を舐めている。

「お前は儂の宝じゃ！儂は前田様のために死ぬ！しかしお前は死んでも守り抜く！お前は儂の生き甲斐じゃ！」

叩く力が弱まった。小吉の背中にりんは顔を付けた。愛おしそうに背を撫で回す。肩がびくっ

びくっと震え出す。

皆は次に来るだろうことを予想した！

固唾を吞んでそれを待つ。

わーとりんは泣き出した。顔を上げわんわんと泣く。

涙が滝のように頬から落ちた。

小吉はがばと跳ね起き、りんを抱きしめた。りんは小吉の厚く広い胸で泣き続けた。

誰かが手を叩いて言った。

「阿修羅が泣いた！」

「そうじゃ！阿修羅を泣かすとは何という悪い男よ！」

「悪鬼羅刹よりも恐ろしい男じゃぞえ！」

「阿修羅が泣いた！阿修羅を泣かせた！」

大合唱が黎明の宮川筋に湧き上がった。

前田慶次は物持ちよ。

かはらげ（愛馬、松風）、

かまやり（小吉）、

ながくろかみよ。

小吉の胸で泣くだけ泣いて気持ちが収まったりんに親方は言った。

「竜胆丸。今日の所は小吉殿と帰るがよい」

涙を拭いながらりんは小吉の懐から親方を恐る恐る見た。

「お前はここで働くと言ったな。まさか愛しい男が現れたからと言ってそれを翻さぬよな！」

回りの若衆達はしんとした。小吉は情け無さそうな顔でりんを見る。

「は・・・い・・・言いました」

「りん！」

この時代の人々はぞんざいに言葉を発しない。言った事は言質として守らねばならなかった。

「え・・・越後！待ってくれ！これには・・・」

「駄目じゃ！小吉さん！・・・でも親方は客は取らせないと伝えてくれたから・・・堪忍して！」

小吉は目を血張らせて越後に叫んだ。りんを大切そうに懐に包んで。

「越後！お前も約定を守れ！」

越後はのほほんとして、煙草を吹かす。

「分かっておるわいな」

りに鼻を削がせようとした若衆が懇願する様に言った。

「お頭！許してあげちゃ・・・」

越後はぎろと彼を見て強く言った。

「じゃ、お前に好きな男が出来たからと言って許さなくちゃならないのか！それならばこんな家を作る必要はなかった！ここを出てどんな所に行こうが掟が有る事は分かってるな！」

若衆はしょんぼりと項垂れた。

りと小吉は間近で見つめ合っていた。お互いの心確かめ合う様に。全ては賽子が転がる様に決まって行く。また振り直すことは出来ないことは、戦場で生死を分けあってきた彼らには分かっていた。それが今の世なのだ。

人は一人では生きられない。町人でも非人と呼ばれる人達でも侍でも、皆、自衛組織の一員として生きていた。家と呼ばれ、邑と呼ばれ、講と呼ばれ、掟と呼ばれる結束で生活の安全を維持しているのだ。

一旦そこから外れば『無縁』となる。自由と引き替えに一切の身の安全は保証されない。どこかの組織に捕らえられ、奴隷となる運命が待っているのだ。この時代は百姓でさえ、奴隷を養っていた。

慶次郎の主従から離れても、若衆茶屋の『家』に迎えられるということは特に不幸ではないのだ。刺客の闇夜の中で生きていくことよりはどれだけましであろう。

越後にしてもこの二人を引き離すのが本心ではなかった。しかし掟を守る事は最優先であったのだ。

この騒ぎを茶屋の二階で泊まっていた客も眺めていた。阿修羅が泣いたのを若衆達と一緒に喝采していた。しかしその客の中で一人ぎりぎらとした目でりんを見ていた男がいた。

その男の右手は手首から失われていた。

りと小吉が寄り添いながら立ち上がろうとする時、その男は右腰に大刀を差し音をさせずに階段を降りてきた。右腕で大刀を押さえて左手で鯉口を密かに切っていた。

親方はりに言った。

「落ち着いたらここへ戻って来るのや。悪い様にはせん」

りは小吉と両手を合わせて頷いた。その顔は泣いた後の菩薩の様な諦観があった。小吉は愛おしそうにそれを眺めた。

「！」

りの目がふと遠くを見た。りの左手が小吉の腹を強く突いた！

「ぐっ！り・・・」

小吉は痛みで体が痙攣し身を丸くして尻餅を突いた。りの豹変に愕然としていた。

「こわっば！死ぬ！」

若衆達の後ろに静かに回っていた右手首のない男が左手で刀をすらと抜き、左半身で大上段に振りかぶってりに向かって飛んでいた！

土間にいたりんの右肩を目掛けて男は大刀を振り下ろす。越後もはっと気付いたが成り行きを見ているしかなかった。

男の剣は左半身のまま上段から右下へ斬り下げられた。新陰流の九箇の太刀の一つ『必勝』と名付けられた使太刀の太刀筋である。もともと新陰流の技ではなく、他流派のものであったと言われる。

りは太刀筋に向かい、太刀が当たる寸前に右半身となり斬風を避けた。りの長い髪の手が寸断された。

避けた瞬間りの左手が動いた。左から右へ風を薙いだ様であった。だが異変に驚いた皆がその手に見たものは、小吉の脇差しであった。

その男はすぐ左にいるりを睨んだ。そしてその目は徐々に上を向き白目を剥いた。

そして居並ぶものが全て震撼することが起こった。

その男の首に横に血の筋が入り、ゆっくりとずれて落ちた。

りは血飛沫をまともに受けた。

「り、りん！」

小吉は腹を押さえながらりの手から脇差しを取り、小袖の袂でりの顔を拭いてやった。りの顔は優しさを取り戻し、泣きそうな表情をしていた。

「誰じゃ・・・こやつは・・・？」

「前に、柳生の庄で出会った。盗賊の頭じゃった。その時、この人の弟を俺は殺したんじゃ・・・」

小吉はりをまた押し懐いた。

越後が叫んだ。

「とんでもない！お前などもう要らぬ！ここで殺生をした者など置いておけるか！」

越後は厄介払いをするようにりん達を追い払う真似をした。

小吉はりを背中で隠す様にして言った。

「じゃ・・・連れて帰ってもう戻さぬぞ！」

越後が応酬する。

「ここの掟をりは破った！もう戻るな！」

小吉はりんの肩を抱いて伏見に向かった。色若衆どもが土手に出て、五条の橋を渡る彼らを見送っていた。まるで血濡れた牛若丸を弁慶が守り連れる様に見えた。宮川筋の方から童歌が追った。

長黒髪は阿修羅じゃぞ
泣いた途端に首を切る
菅公（菅原道真）よりも怖ろしや
前田慶次しか困えぬわ

了